

来日直前インタビュー

いま、世界中から出演のオファーが絶えることがないダニエラ・デッシーとファビオ・アルミリアートの2人が、8月末に行われる藤原歌劇団《アドリアーナ・ルクヴール》で共演する。いったん舞台を離れば夫婦でもある2人。来日を直前にひかえた2人にミラノ、パルマでそれぞれ話を聞くことができたので、ここに紹介する。

ダニエラ・デッシー

舞台に立つと父の顔が見えるの。慰めかもしれないけれど、その感覚が、さっきのようなアヴェ・マリアを歌わせてくれる……。

取材・文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

スカラ座の《オテロ》公演終了後、デッシーは疲れも見せず、ゆつくりとインタヴューに応じてくれた。5年ぶりの再会だろうが、あまりにも変わっていない美しい姿に、かえってびっくりした。

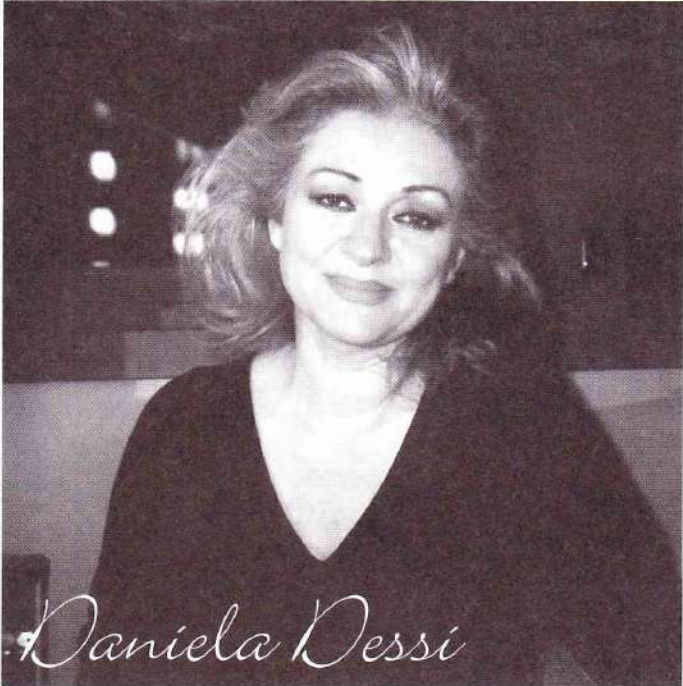
——あなたのマッダレーナの聴きどころは？
デッシー（以下、D） デステモナの後に、マッダレーナの話をするのはちょっと難しいけれど（笑）、そうね、デステモナとマッダレーナは似ているわ。優しくて、天使のようで、それでいて強い。マッダレーナは共に死ぬことを選ぶほど愛し、デステモナは愛する人に殺させるほど愛していたものね。聴きどころはズバリ、アリアね。ヴェリスモ・オペラの中で、一番表現豊かなアリアだと思っわ。

——役作りの難しさは？

D 若い女の子が、オペラの中で急激な成長を遂げるという点は、バタフライに似ているわね。それを、比較的短い役の中で表現するのがとても難しいわ。

——これまでの役への取り組み、経験は？

ダニエラ・デッシー



Daniela Dessi

年のメトロポリタン歌劇場来日公演で知ってはいただけけれど、初共演なのに音楽的にピタリとくるものがあった、それが、人生の中で一番大切な男性との出会いにもなったというわけ。

——ピアノを専攻されていたことは、どう役に立っていますか？

D 私は最低なピアノリストだけれど（笑）、最高のピアノリストでも音楽的でない人もいるから……（笑）。ピアノを勉強したお陰で、ずっと独りで勉強できているのが、長所かしら。人に何かを言われることなく、自分だけで、じっくりと役を煮詰められるから。

——ファビオ・アルミリアートさんとは私生活でもよいパートナーであるようですが、歌い手と暮らすことについて？

D もちろん、若い時は難しいけれど、ファビオと出会った時は、2人共、もうキャリアアを持っていたから、上手くいつているわ。もちろんストレスもあるけれど、一緒に歌うと、彼のためばかり考えているから。でも、特にヴェリスモ・オペラでは、実際に深く知って

いる相手とでないとは表現できない部分があるわ。そういうものは観客にも伝わると思うの。私たちの人生を舞台で表現できる。それに、同じ相手でも、役柄が違えば、別な部分の性格が出て来て、常に新しい彼に恋ができ、それが2人の絆をより

D ファビオ（アルミリアート）が同じ話をしたと思うわ。（それでもあなたの口から、あなたの言葉で聞きたいと言うと）2000年のニスでの《アンドレア・シエニエ》は、ニール（シコフ）の急病で、彼が来たの。97

深めてくれるのも魅力よ。

——78年にデビューして以来、常に第一線で見られる秘訣は？

D 情熱、慎重であること、そして勉強。私は歌っていない時でも、いつも、どうやったらあの音をもっと上手く出せるか、とか考えているの。

——母親業と仕事の両立については？

D うまく計画を立てれば、両立は可能なんだよ。両立というよりむしろ、妻と母と仕事の三本立てもね。何かを犠牲にすると必ず後悔するから。私は息子がいることで、かえってエネルギーをもらえるの。私の人生で3人の大切な男は、息子とファビオと父。残念ながらちょうど7カ月前に亡くなったけれど（これは絶対に書いてね）と念を押しながら、毎回舞台上立つと、父の顔が見えるの。慰めかもしれないけれど、父がいつも一緒にいてくれる気がする。その感覚が、さっきのようなアヴェ・マリアを歌わせてくれるの。

——これからの夢は？

D まずはノルマ。「いま歌わなきゃいつ歌うの？」って感じ。あとは、マクベス夫人。ヴェルディの描き方が素晴らしいわよね。それとカルメン！

——日本の聴衆にメッセージを。

D 今まで教えきれないほど日本に行っただけれど、私は日本が大好き！日本人は文化的だし、集中力があるし、知識欲が旺盛ね。日本料理も大好きで、あの料理の淡泊さは、日本人の純粋さを表していると思っわ。日本社会の硬い殻を一度はずすと、感動が素直に出てくる、子供のような無邪気さが隠れているのよ。そういう聴衆の温かさにまた触れられるのを楽しみにしています。